

# ‘The Wedding Knell’の〈永遠〉の結婚の真相

野 呂 浩\*

## A Study of N. Hawthorne’s ‘The Wedding Knell’

Hiroshi NORO

This story was highly valued by Edgar Allan Poe, but somewhat ignored by scholars of Nathaniel Hawthorne in the twentieth century.

The story can be understood on a superficial level as a story of an aged gentleman who tries to exact his revenge on a very old lady, who forty years ago was his fiancée but has since married twice.

Other interpretations, including a biblical reading (the relationship between God and the Israelites), an isolation theme, criticism of 19th century America, and the author’s own view of marriage, can all be taken from this story.

One new interpretation is that this short novel is a reflection of the author’s lifelong agony, in that he became a novelist, unable to escape his fate of being unable to interact with people, merely being an observer, and his dedication to the artistic world, because he dedicated his life to the timeless artistic world rather than addressing the timely issues of worldly affairs. This can be seen if we reexamine the story very closely in connection with the author’s notebooks, and later stories’ themes.

In short, this work can be regarded as a revelation of the author’s hidden psychology. Therefore, we can conclude that the essence of Nathaniel Hawthorne himself and his literary world can be discovered in this story. As such, this is not a work to be ignored, rather, it is a very significant work by this author.

### I

Nathaniel Hawthorne の短編小説, ‘The Wedding Knell’は, 1836 年に, *Token* 誌に発表され, その後, 1837 年に, *Twice-Told Tales* に収められた作品である<sup>1)</sup>.

Cotton Mather による, 死が近いにも拘わらず, 華麗な婚礼衣装を身に着けたいと切望する老

婦人を, 冬の年令には, 夏のドレスは似合わないと言った, 1692 年の説教, *Ornaments for the Daughters of Zion* や, 亡霊となった騎士が, 花嫁に, 結婚して同じ棺桶に入ってくれと誘う, *Burger* の詩 *Lenore* 等の影響があるのではないかとされる作品である。

この物語は, Edgar Allan Poe 好みのゴシック的色彩が濃い小説である故か, これは想像力を駆使した傑作であると高く評価したが<sup>2)</sup>, 20 世紀の大方の Nathaniel Hawthorne 文学研究者には無視されてきたような作品である。

\* 東京工芸大学大学工学部基礎・教養, 教授  
2000 年 9 月 14 日 受理

Nathaniel Hawthorne は、この作品の発表の1年後、Sophia America Peabody と出会い、その後、婚約、結婚と進むので、あるいは、作者の結婚観を読み取ることも出来ようが、一般的には、花嫁の虚栄と花婿の復讐の話と解釈される。勿論、この他に、自分の属する社会から孤立すると、やがて精神的に狂いが生じ、社会のアウトカーストに墮すると見る読みや<sup>3)</sup>、宗教的解釈もある。

確かに、そのような複数の読みを許す曖昧性を備えた物語であり、個々の読みはそれなりの説得力を持つが、物語全体を包括的に解説出来る読みはないものだろうか。

想像力の産物でもある文学作品の物語の中に、作家の影を追い求めるには、十分な注意が必要であることは承知している。しかし、この作品には、作家 Nathaniel Hawthorne が、生涯悩み続けたとされる特有の苦悩が色濃く反映しているようである。作家 Nathaniel Hawthorne の本質とも言えるようなものが、どのように描かれているのかを突き止めるのが、本論文の狙いである。

## II

さて、まず、はじめに、物語の荒筋を確認しておきたい。

祖母の時代に、ニューヨークの、ある教会で実際に執り行われた結婚式であるとの説明から始まる。

まず、六十五歳の花婿 Mr. Ellenwood の、四十年程前の婚約者であった、花嫁 Mrs. Dabney は、二度の結婚をすでにこの時までを経験している高齢の女性である。最初の結婚は、彼女の二倍も年上の裕福な人物が相手だったが、やがて、その夫は死に、莫大な遺産を相続した。その後、年下の南部男と再婚する。そして、その夫も死んでしまい、再び未亡人になってしまい、結局、子どものいない彼女は、一人自分の生まれ故郷に帰ってくる。老婆になっても相変わらず厚化粧を好む女性である。そして、若かりし頃の婚約者、Mr. Ellenwood と、いわば、三度目の結婚式を挙げることになる。

Mr. Ellenwood は、婚約が破棄された後、四十

年間も、独身生活を貫抜きとおした。人々からは、狂人呼ばわりもされた。噂によれば、Mrs. Dabney の方からの働きかけで、若かりし頃の恋が復活し、目出たく、二人の結婚式となったのである。

結婚式の当日、花嫁は、皺くちの顔に厚化粧をして、しかも、豪華な花嫁衣装を着て若い乙女達を従えて教会にやってくる。乙女達の存在が、教会を一瞬明るくはするが、なぜか、不吉にも、花嫁が教会の敷居に触れた途端に、二人の結婚を祝う鐘ではなく、弔いの鐘の音が重々しく打ち鳴らされ、会衆は不吉だときよっとする始末である。

やがて、霊柩車の一行が教会に到着する。皆は、誰が亡くなったのかと心配していたが、花婿の Mr. Ellenwood は、こともあろうに、死人に着せる衣である経帷子を着て現れたのである。勿論、会衆は恐れおののく訳だが、人生経験豊かな花嫁は、何とか、結婚式を無事に進めようとする。しかし、残酷極まりないと叫んでしまう程ショックを受ける。

まもなく、Mr. Ellenwood は、このような花嫁に向かって自分の心の内を包み隠さず曝け出す。彼女の方こそ、彼から幸福、希望、人生の目標等、この世の喜びすべてを奪い去ったではないか。他の男と二度も結婚して、心も体も蝕ばまれた訳だから、どちらが一体、残酷な仕打ちをしたのか。彼女の命そのものとも言える、若さ、美しさ、みずみずしい心などは全部以前の夫達が享樂しつつしているのだから、今、彼に残されているのは、彼女のやがて朽ち果てる肉体と死のみではないのか。従って、今回の結婚は、墓場の入り口で結婚をするようなものである。だからこそ、弔鐘を鳴らすように寺男に頼み、花婿自身も経帷子姿で結婚式に馳せ参じた次第である。結婚して、我々の棺桶に入ろうじゃないか。「永遠」との結婚をしようじゃないか、と語る。

Mr. Ellenwood は、一見、花嫁を激しい口調で責めているようであるが、しかし、この世的な華やかさに翻弄される生き方から目覚めて貰いたいと言う、心のこもった熱心な語りかけによって、人生の晩年にある彼女ではあるが初めて、一切の空虚な虚栄が消え去り、人間的な素直な気持ちを

抱くに到る。そして、「時」とではなく、「永遠」との結婚を承諾するのである。

Mr. Ellenwood も、そうした花嫁の変化に深い感動を覚え、死に顔ではあるが涙が流れる。このようにして、会衆の感動の中に厳かに式が執り行われ、「永遠」との結婚に出立する二人を祝福する、オルガンの演奏が、弔いの鐘の音を上回るのである。

このようなあらすじを考えてみると、この話は、果たして、老齢になってから、昔捨てられた婚約者に墓場への結婚を迫る男の復讐物語に過ぎないと断定出来るのか。一体、花嫁の二度もの結婚は何を物語るのか。「永遠」の結婚とは如何なる意味か。また、「時間」と「永遠」とはどのような意味で使い分けられているのか。さらには、物語の締めくくりに描かれている、荘厳な勝利を奏でるオルガンの音が〈婚礼の弔鐘〉を圧倒したというような箇所には<sup>4)</sup>、何か特別なメッセージが秘められているのか等。どのような読者もこのような疑問を抱くのではなかろうか。しかし、Nathaniel Hawthorne の作品では特に珍しいことではないが、そのような問いに対する答えを物語の中に見つけることは出来ないのである。結局、解釈するという労を迫られるのである。

### III

さて、それでは、まず、これまで研究されてきた幾つかの読みの妥当性を考えてみよう。

Mr. Ellenwood と Mrs. Dabney の関係を、神と選民イスラエルとの関係と解釈する研究がある。つまり、様々な不信行為とも言えるような生き方をした Mrs. Dabney は、イスラエルであり、そのようなイスラエルに、神は、つまり、Mr. Ellenwood は、そうした彼女に心底から悔い改めを迫るのである。彼女、則ち、イスラエルは、最終的には、悔悛し、神に立ち返る決心をする、一種の宗教物語であると読む<sup>5)</sup>。

魔女裁判の判事として、魔女達の処刑に手をかけた自分の先祖の罪業、ならびに、ピューリタン社会の冷酷無惨な諸々の歴史的事実を熟知し、呻吟していた、Nathaniel Hawthorne を思えば、ア

メリカとイスラエルを重ねて、刹那的な生き方を悔い改めよ、と訴える宗教物語と読みたくなるのも敢えて否定は出来まい。しかし、自らは教会に行かず、カーテン越しに、教会に向かう人々を眺めるような作家が、宗教的主題をメインテーマとして扱っていると考えるのは難しい。むしろ、宗教的な物語と思われる話の奥に何か秘められているのではなかろうかと考えて、作品に接近することが、特に、Nathaniel Hawthorne の作品を読む場合には肝要である。そうしなければ、作家の強かな意図に欺かれてしまって、誠に浅薄な読みしか出来なくなってしまう場合が少なくないからである。

それに、自分の属する社会から孤立すると、その結果として、心身に異常をきたし、社会から疎外されてしまうという読みは、特に、誰かの研究成果という訳ではないが、Nathaniel Hawthorne の作品をそのような観点から読むのはよくあることである。確かに、Mr. Ellenwood も、六十五年もの間、孤独な独身生活を送り、その結果、社会からは、変人扱いもされてきたので、そういう物語だとは読める。しかし、彼はもともと気が狂っていたわけでもなく、むしろ、きちんとした人生の目標がないための結果であって、決して原因ではないと、この点に関しては、珍しく作品中に明確に説明が付け加えられている<sup>6)</sup>。

この読みの場合も、花婿の今までの生きざまが、ただ、社会に溶け込まないそのことを問題視するより、Mr. Ellenwood の、社会とはある一定の距離を置くという行為に、何らかの意味が込められているのではなかろうかと探ることの方が大事ではなかろうか。

「永遠」に生きるとは、世俗性に惑わされることなく、あらゆる現象の背後に精神的意義を見出すことである。人間の有限性の理解が不可欠であり、人間の苦悩等を認識した時に、結婚は、「時間」ではなく、「永遠」の結婚になるとの解釈もある<sup>7)</sup>。

作者が幾つかの作品で、結婚について、「時間」ではなく、「永遠」と結婚することを描き出すのはこのような考えに基づくのだ、ともこの読みは主張する。

「時間」というのは、世俗性の象徴であることは頷けるが、この世の有限性を理解した時に、「永遠」の結婚となると結論付けるのは、少し論理の飛躍があるのではなからうか。

Nathaniel Hawthorne は、別に、結婚カウンセラーでもなく、また、自らの結婚観をわざわざ自分の文学作品の中に忍ばせるような作家とは思えない。結婚観を作品中に読み取るのは勿論自由であるが、その結婚に何か深い意味が秘められていないかを考察することの方がより重要であろう。

さらには、新しい国、アメリカにおいては、「死」が無視され、「墓」が忘れ去られているとして、これは、一種のアメリカ社会批判の書であるとも、この解釈の延長線上に読むようである<sup>8)</sup>。Nathaniel Hawthorne は、十二年間作家修行をしたと言われている部屋から、よく自分の先祖の墓場を眺めていたようである。Nathaniel Hawthorne は、墓場や死の研究者ではない訳だから、文字どおり読むのではなく、そうした語を用いる理由をよく踏まえて作品を読まなければなるまい。

以上、宗教的解釈、疎外、結婚観、社会批判等の解釈を考えてみたが、いずれも納得出来る内容を持っており、お蔭で作品のある一面はよく見えてくるが、作品全体を説明し尽くせるような読みとは思えないのである。作品世界を隅から隅まで説明可能な読みを提示出来るかどうか自信はないが、少なくとも、新たな視点で読まない新しい世界は見えてこないだろう。

文学作品を読み解く際、作品そのものを精読するだけで事足りる場合もあるだろうが、Nathaniel Hawthorne の物語を読む場合には、まず、どのような視点が必要であるかをも慎重に判断しなければならない場合が少なくない。

既に触れたことではあるが、あまりにも不用意に、作家個人の生涯と絡めて読んでしまうと、文学作品を、単なる、作家の伝記的資料に貶める危険性を筆者は十分理解しているつもりである。しかし、今回、分析の対象としている作品だけは、アメリカの歴史、心理学、神話、出典、英米の文学作品等との絡みではなく、この作品を執筆した作者、Nathaniel Hawthorne 特有の苦悩との関連

で読まない、それこそ、若い時分に裏切られた婚約者に、結婚して一緒に棺桶に入ろうじゃないかと誘う、醜い老紳士の復讐劇物語にすぎないと結論づけたくってしまうのである。

#### IV

Nathaniel Hawthorne は、Bowdoin College を 1825 年に卒業後、1837 年まで、十二年間、自分の故郷 Salem に戻り、薄暗い一室でひたすら、歴史、文学関連の書等、膨大な量の読書をし、執筆する、作家修行に励むのであった。勿論、全く社会との接触を持たなかった訳ではないようであるが、Nathaniel Hawthorne、二十一才から三十三才までの、寂しい孤独な年月である。

十二年間という年数の孤独に耐えられたのは、勿論、芸術家(具体的には小説家)になる並々ならぬ決意を持っていたからに他ならない<sup>9)</sup>。

1828 年には、最初の長篇小説 *Fanshawe* を自費出版するが、気に入らず、まもなく、全てを回収して焼いてしまう。勿論、1831 年ころから、*Token* 誌や *New England* 誌に、短編小説やスケッチを匿名で何編かは発表している。しかし、なかなか作家としての名声を得ることは出来ず、1840 年の日記には、世間は自分が墓場に入るまで自分を知ることはないのではなからうか。既に自分が墓場の中にいるかのような気さえすることがある、との記述が見られる程である<sup>10)</sup>。

今回、考察の対象としている作品 'The Wedding Knell' が発表されたのは、1836 年である。作家として世に認知されたい強い願望を持ちながらも、世間の冷たい視線に耐えていた頃の作品である。この作品を執筆していた頃は、Nathaniel Hawthorne は、実名を使って作品を発表したことがない。従って、この作品は、この頃の作家の非運な姿が影を落としている作品であることは間違いないが、もう少し、'The Wedding Knell' 発表当時、そして、その後の作家の人生と作品世界をも視野に入れて考察を深めよう。

*The Scarlet Letter* の 'The Custom House' には、自分が作家になることの意義を全く解しないであろう先祖のことに触れている。一体如何なる

意味で、小説家が、神と社会に奉仕することになるのかと嘆く先祖との会話を記している。これは、先祖というより、作家自身が、如何なる意味で、自分のペンで描く物語で、神や世に奉仕することになるか分からずに悩む姿が素直に描きだされている箇所であろう<sup>11)</sup>。

また、'Fragments from the Journal of a Solitary Man'では、自分を見るすべての人間が、恐怖の眼差しで見、震えおののいているのに驚き、自分の姿を確認してみたら、何と経帷子でニューヨークのブロードウェイを歩いている自分の姿を発見するというような件がある<sup>12)</sup>。死者同然の姿、つまり、現実社会では皆と喜怒哀楽を共にする生き生きとした歩みがどうしても出来なくなってしまう運命を持つ、Nathaniel Hawthorne 自身の姿の投影と考えられる、Oberon が、主人公なのである。

Nathaniel Hawthorne は、すべての人間には、墓場と土牢があると考える。普段、心の奥底に埋葬し、閉じ込めているものに、形を与え、蘇らせるのが、Nathaniel Hawthorne の作家としての仕事であろう。

日常世界で普段は決して現れない、視覚では捉えられない世界を、Nathaniel Hawthorne は、物語の中に登場させる訳だから、そうした世界は、日常世界に生きる者から眺めるならば、誠に薄気味悪い異質な存在になるのは当然であろう。そういう意味では、Nathaniel Hawthorne の、多くの文学作品世界には、日常世界に非日常世界が蠢くことになり、読者は、特に、非日常世界の現象の語るメッセージの意味を正確に読み解かなければならなくなる。

小説家として生きる際に、絶対に回避出来ない悲しい性は、同じ世界に生きている仲間を観察対象としてしまうことである。そして、観察される側からは気付かれないことが必要になる。それは、結局は、観察する者との交わりを拒絶することに等しく、一種のうしろめたさ、罪悪感のようなものがどうしても付きまってしまう。このことが、Nathaniel Hawthorne を生涯苦しめたと言われている。

自分の顔に黒いベールを着けて生涯を過ごした、短編小説 'The Minister's Black Veil' の Fooper 牧師はそうした人物の典型である。

婚約者に、そのベールを取り外して素顔を見せて下さいと懇願されても、決して外さずに生き、なお、死の床に伏しても、絶対にそのベールは取ってはならないとして、ベールを着けたまま死に、葬られる。

ベールは Fooper 牧師自身の生きざまそのものであり、取り外したり、また着けたりすることが出来るようなものではないことと理解すべきであろう。相手に察知されないように、対象を観察して生きることに堪え難い罪悪感のようなものを抱いていた、Nathaniel Hawthorne の内面の葛藤が見事に反映している作品である。

今回、研究対象としている作品に登場する Mr. Ellenwood も、六十五歳まで独身生活を貫き、社会の真直中に飛び込む生き方を選択せず、生涯を通じて学究の徒として何かを観察する生涯を送ったであろう(何を具体的にしたかの説明はない)という意味ではまったく、Fooper 牧師と同じ人物である。そして、この 'The Minister's Black Veil' という短編小説は、奇しくも 'The Wedding Knell' と同じ年に発表されている作品なのである。社会からの孤立は自らの選択の結果であり、また、観察することについての後ろめたさは十分過ぎる程認識している、Nathaniel Hawthorne の姿が、Mr. Ellenwood の姿にダブって見えてくるではないか。

## V

さて、臆げながらではあるが、'The Wedding Knell' に潜んでいる世界が姿を現し始めたようである。

まず、二度の結婚を経験した Mrs. Dabney は、誰か特定の人物を念頭において創造されたものではなかろう。後に、結婚することになる、Sophia と初めて出会うのも、この作品発表の一年後のことである訳だから。

従って、彼女の姿に、作家 Nathaniel Hawthorne の影がちらつくようなことはなく、むしろ、

Nathaniel Hawthorne が、強い関心はあるが、芸術家志望故に、現実世界に溶け込むことに非常に慎重な姿勢をとったがために、この世のまっただ中に飛び込むような生き方をする女性を敢えて創造した、と読んで差し支えないだろう。自分が飛び込むことの出来ない世界の人物をわざわざ創造した意味では、作家の内面の一部がそれなりに反映しているとも言えようが。

勿論、Nathaniel Hawthorne の常ではあるが、お金持ちや年下の男性に弱い女性を責めてはいるようであるが、非運な運命に翻弄される Mrs. Dabney を厳しく断罪するどころか、同情的に描き、最終的には、Mr. Ellenwood の説く、「永遠」の結婚を受け入れさせていることも忘れてはならない。Nathaniel Hawthorne の筆致には、悪の方向に傾斜しがちな人間を決して、突き放すような感じはなく、一種の暖かさ、優しさのようなもので包み込む特徴がある。

一方、Mr. Ellenwood は、様々な点で、作家 Nathaniel Hawthorne の分身と呼びたくなる登場人物である。まず、何よりも、婚約後四十年間の独身生活である。Nathaniel Hawthorne は、大学時代から結婚は絶対にしないと友人と賭けをするなど、結婚に対しては否定的な見解の持ち主だった。四十年という長い年月が問題ではなく、結婚という、この世の幸せと思われるようなことに自分の存在をかけることが出来ない姿が似ているのである。

現実の Nathaniel Hawthorne は、後に結婚し、妻の Sophia と、子供達を愛し、特に大きな家庭上の問題もなく、幸せな家庭を持ったと言われている。

人生の喜び、幸福、そのようなすべてを奪い取ってしまったと、かつての婚約者に語る Mr. Ellenwood には、まだ、現実社会の幸福に多少の未練があるような響きもある。生身故の Nathaniel Hawthorne の心の揺れが少し表現されるのも極自然なことであろう。

もともと、この作品の展開を考えれば、それ程複雑な物語ではない。まず、作家として、特に世間が認めるような作品を何一つ残せず、婚約まで

到ったのに、その後、結婚へと進むこともなく、四十年も独身生活を送り、人生の晩年に一人で墓場に入らなければならなくなるのではなかろうかという恐怖心が滲んでいる物語である。物語では、すでに肉体的にも美しさ、若さなどない花嫁も登場する訳だが、これは、世間との接触をほとんど持たない自分は、まともな時期に、並な結婚もできない運命にあるのではないかとの恐れと解しているだろう。

それに、世間からは半狂人扱いされている点であるが、Nathaniel Hawthorne は、大学卒業後十二年もの長い年月、故郷の一室に閉じこもり、多少の作品を匿名で発表する以外はさしたる世間との接触も無く生きている様を、作品中で、世間に自分を狂人呼ばわりさせているのだろう。もともと、別に遺伝的に、狂人ということではなく、人生に確固たる目的を持たないで生きている結果であって、決して原因ではないのだとの説明も、当時、作家になるという明確な目標はあったが、本当に作家になれるかどうか十年以上の努力にも拘わらず全く自信を持てなくなっている Nathaniel Hawthorne の内面の苦しみそのものの説明と受け取ることが出来よう。社会から孤立するから狂人になるのではなく、孤立するものを社会が狂人呼ばわりするのである。何かを一事に求めているが故の狂人じみた生き方は、精神のバランスを失った人間というよりは、聖なる何かを宿している狂者のようでもある。

この他に、細かいことではあるが、自分の気持ちだけを大事にするとか、病的なくらい神経質に人目を避ける、世間の物笑いになるのをひどく気に病む等の Mr. Ellenwood の特徴等も、'The Wedding Knell' 執筆当時だけの特徴ではないが、Nathaniel Hawthorne らしさがよく出ていけると言える。

さて、最後に、「時間」に対する「永遠」を少し検討しよう。「永遠」の結婚は、それこそ単純に読めば、もう二人とも老齢であり、この世には時間が残されていないのだから、「永遠」の世界、つまり、あの世で結ばれましょう、と誓い合う箇所と解釈したくなるが、今まで眺めてきたような観点

からは、そのような読みは成立しなくなるのは明白である。

有限な人間世界の諸々の特質を認識して結婚することが、「永遠」の結婚になるとの説もあることは既に述べたが、しかし、今までの考察からは、この物語はそもそも結婚物語の形をとってはいるが、作家の墓場や土牢に閉じ込められていた苦悩が作品化したものと捉えて間違いなからう。

従って、「永遠」の結婚とは、まず、この世の価値観、世俗性との惜別である。これが大前提であり、これなくして「永遠」ではないのである。だが、果たしてこれだけで、「永遠」と言えるであろうか。最後は、永遠の結婚をする二人を祝福するオルガンの音が、弔いの鐘を上回る訳だが、これは、単に、この世の幸福を捨てて、あの世の結婚に旅立つ老夫婦を讃えるだけではなからう。

後の作品の内容との関わりで読むと、「永遠」との結婚というのは、この世の有限性に左右されない、芸術世界の「時」であり、つまり、芸術世界との一体化と解される可能性がある。

‘*The Artist of the Beautiful*’ という短編小説では(新婚当時に執筆された作品と考えられている)、命を持った蝶を創造した人物の話が語られている。美を追求するその人物が創造した蝶は、命を付与され、実際に飛ぶわけだが、まもなく子どもに握り潰されてしまう。しかし、その芸術家は別に落胆した様子もない。たとえ、滅ぼされたとしても、この世の生命をさえ持つものを創造したことそのことに満足を感じているようである。

芸術的生命とは、生物学的な生命ではない。子どもに握り潰されるのは生物学的側面の生命なのである。つまり、やがて滅びる生物学的、あるいは、技術的存在ではなく、この世的な「時」に支配されない芸術生命の創造であり、それが「永遠」世界であることが分かる物語である。

物語の Mr. Ellenwood は、芸術家ではないが、学究肌の人物で、社会との接触を断って生涯一事に生きようとする様は、Nathaniel Hawthorne とそっくりである。同じ時期に発表された、‘*The Minister’s Black Veil*,’ や、‘*The Artist of the Beautiful*’ のような、後の作品に表れるテーマ、

並びに、今回分析の対象としている作品が発表された頃の、作者の奥深い部分に閉じ込められている、観察者として生きる罪深さ、人との接触を断っても、芸術的世界、芸術的時間に命を捧げ尽くす決意、並びに、彼の日記の記述等から、改めてこの ‘*The Wedding Knell*’ を眺め直すと、世間に認められるような仕事をすることなく墓場へ旅立つことになりかねない恐怖心故の「永遠」の結婚だけのように見えようが、その奥には、芸術美の「永遠」性と一体化する結婚が重ね合わせられていると解釈しても無謀ではなからう。自分の実名も使えず、果たして、美の創造者になれるかどうかも分からないので、後の作品に現れるような程、それと分かる程あからさまには到底描けない、描きたい願望を押さえている気持ちも込められているよう。

Nathaniel Hawthorne 作品の場合には、光を当てると影絵のように、物語世界に潜んでいる何ものかがあぶりだされることがある。以上の分析で、科学的に完全に実証したと言えない脆さもあることは否定出来ないが、一つの可能な新しい読みとはなろう。

繰り返しにはなるが、‘*The Wedding Knell*’ は、この世の喜び、幸せとは縁遠い年令になった老紳士が、昔の恋人に墓場で結婚し、同じ棺桶に入ることを申し出る、背筋が寒くなるようなゴシック的な復讐物語でもなく、あるいは、宗教物語、疎外、結婚観、社会批判の書でもなく、むしろ、作家 Nathaniel Hawthorne の心の墓場、牢獄に蠢いている特有の苦悩、そして、芸術の「永遠」性にすべてを捧げる重大決意が、織り込まれている作品であることが分かるのである。従って、到底無視など出来る作品ではないと断じざるを得ない。

#### 注

- 1) 使用テキストは、Nathaniel Hawthorne, ‘*The Wedding Knell*,’ *Twice-Told Tales, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, IX (Columbus. Ohio State Univ Press, 1974 )
- 2) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader’s Guide to*

- the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston, G.K.Hall, 1979) p 322.
- 3) *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*, p.321.
  - 4) *Centenary Edition*, IX Twice-Told Tales, p.36.
  - 5) 江草清子 ナサニエル・ホーソーンの研究(その四)― The Wedding Knell の一考察― 高知大学学術研究報告 第20巻 人文科学 第3号
  - 6) *Centenary Edition* IX p.28.
  - 7) 山本雅 『アメリカ社会の批評家としてのホーソーン― アメリカ社会とロマンス―』 溪水社, 1996年, pp 174-176.
  - 8) 『アメリカ社会の批評家としてのホーソーン― アメリカ社会とロマンス―』 p.176,
  - 9) James R. Mellow, *Nathaniel Hawthorne in His Times* (Boston, Houghton Mifflin Company, 1980) p.36
  - 10) *Centenary Edition* XV The Letters 1813-1843 p. 494.
  - 11) *Centenary Edition* I *The Scarlet Letter* p.10.
  - 12) *Centenary Edition* XI *The Snow-Image Uncollected* p.318.